# IS インフィニット・ストラトス ～大切なものを奪われた少年～

リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　インフィニット・ストラトス　～大切なものを奪われた少年～

【Ｎコード】
Ｎ３６７９Ｚ

【作者名】
リオ

【あらすじ】
世界の兵器がＩＳ（インフィニット・ストラトス）になった時には世界の常識も変わった
ＩＳ操縦者の育成機関、ＩＳ学園に世界で二番目にＩＳを動かした少年、沖野（おきの）　一馬（かずま）が学園へと入学する
彼はこの学園で何を感じ、何を学ぶか

今、物語の舞台の幕が上がる

## 初めに

※この作品は原作ＩＳの作者リオが考えた二次創作です

※注意

・オリジナル主人公は束が嫌いです。束は俺の嫁派の方

・多少話は違ったりする事が多いです。ですので原作遵守派な私は読まん。の方

・ＩＳなんか大嫌いだぁぁ！！の方

・オリジナルキャラが嫌いな方

・主人公機は若干チートです。チートは好きじゃない方

・更新が鈍速でこれ以上待てるかぁ！の方

は見ない方が宜しいかと思います

それでも見たいという方はどうぞ此方へ

では、始まり始まり

## 第1話　教室にて（前書き）

原作だとショートホームルームまでの間の話です

それでは、どうぞ

# 第1話　教室にて

【教室内】

「・・・・・」

廊下側2列目の1番後ろの席に座っている男子生徒、沖野　一馬は
黙って辺りを見渡す

一馬と廊下側3列目1番前に座っている男子生徒、織斑　一夏以外
この教室にいるのは全員女子生徒のみ

一馬と一夏をチラチラと見ている視線がチラホラと女子生徒がおり、
そんな中一馬は

「（…ーー暇だな）」

何時担任の先生が来るか分からず、正直暇を持て余していた

「（ーーそう言えば、チーフが学園に着いたら読めとか言ってたメ
モがあるから、それを今のうち見とくか）」

一馬は制服のズボンのポケットから1枚のメモを取り出し、内容を確認すると

困ったことがあるのなら、学園の更織　楯無に尋ねとけ。力になってくれると思う

清音より

「（更織…楯無か。今は気にしなくても良いか）」

と一馬がメモの内容を確認すると1人1人の先生がやって来た

「皆さん、入学おめでとうございます。私は副担任の山田　真耶です。一年間よろしくお願いしますね」

と山田先生は笑顔で言っていたが、辺りはシーンとし、誰の返事もない

「えぇっと。じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。では、出席番号順で」

と山田先生の指示で出席番号順に生徒は自己紹介をし、次は一馬の出番となった

「次は…沖野　一馬くん」

「はい」

一馬は返事をした後に席を立ち上がるとクラスの生徒全員が一馬を見ている。一馬は余り慣れない視線に動揺せずに喋る

「どうも、沖野　一馬です。中学の時は名字で呼ばれてたんで、そっちの方で呼ばれると有り難い。とりあえず、これから1年宜しくお願いします」

最後に一礼すると大きくはない拍手が起き、当たり障りのない一馬の自己紹介が終わると次は織斑　一夏の番となる

「え一……えっと、織斑　一夏です。宜しくお願いします」

一夏の自己紹介は一馬よりも短く。以上ですと言った時には、何名かの女子がずっこけた

「（まぁ、根暗と思われたくなくて無理矢理終わらせたって感じだな。……ん？）」

１人の女性が出席簿らしきもので一夏の頭を叩く

痛そうに頭を押さえ一夏は振り返ると

「げぇっ、関羽！？」

女性は次に角で叩いた

「誰が三国志の美髯公だ、馬鹿者」

因みに一夏の頭を叩いた女性は織斑　千冬。ＩＳ業界では知らぬ者はいない…はず

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

頭を押さえうずくまる一夏を後目に真耶と一言交わした後、千冬は教卓の前に立ち喋り始めた

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を１年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠１５歳を１６歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うこ

とは聞け。いいな」

千冬がそう言うと、教室は静まり返る、そしてしばらくすると

『キャ――――――――！　千冬様、本物の千冬様よ！』

「（うおっ！？凄い声量だな）」

千冬が現れたことでクラス中の女子は黄色い声を上げて、その中で一馬は内心で驚きながら耳を塞いでいた

まるで鼓膜が破れそうな位声量がヤバいのである

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

1人危ない奴が居たような気がしたがそれは置いとき

「はぁ……まったく毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスだけに馬鹿者を集中

させているのか？」

と、黄色い声が聞こえるなか千冬は溜め息をついたのだった

その後に一夏と千冬の関係が姉弟と分かったとき周りは

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男子で『ＩＳ』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「でも、沖野君の場合どうなるの？」

「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」

女子達が騒ぐが千冬はスルーをする

今の世界の兵器は戦闘機や戦車ではなく、インフィニット・ストラトス（略称：ＩＳ）と呼ばれるパワードスーツ。ＩＳは今までの兵器を遥かに超えた存在でどの世界にもあるのが当たり前。但しＩＳは女性にしか動かせない筈なのだが、例外が一馬と一夏である

理由はそれぞれ不明で動かした本人達も分かってない状況なのだ

説明は以上で、騒いでいるなか一馬は誰にも聞こえないように呟く

「今年の1年は騒がしくなりそうだな」

と表情は呆れながらも少し面白がっているようにも見える

# 第2話　代表候補生

【教室内】

「……はぁ」

一馬は溜め息を吐く

その理由は教室内、廊下に多くの女子生徒が一馬を見る視線。話しかけようとするが、互いに牽制しあって中々動かない

一馬自身、女子と話すのは苦手ではない。軽い会話程度なら普通に出来るんだが、誰も動こうとはせずに一馬を見続けられているのは正直辛い

先程まで一夏も見られていたんだが、ポニーテールの女子生徒と一緒に教室から出たのである

「誰か、この状況を何とかしてくれ」

一馬は2度目の溜め息を吐く。一馬の願いが叶ったのか、この状況を打破する女子生徒が現れた

「ちょっとよろしくて？」

「……？」

左から声が聞こえ、左を向くと金髪にすこしロールをかけた女子生徒が立っていた。色白や顔つきから欧州系の人だと思う

そして一馬はこの女子生徒の名前を覚えていた。自己紹介で一夏ほどとは言えないが目立っていたので印象に残っている

「確か…イギリス代表候補生のセシリア・ウォルコットだっけか？」

「オルコットですわ！あなた失礼でしてよ！！」

訂正。一馬は名前は完全には覚えてないようだ

「今のは俺が悪かった。すまない。それで、セシリア・オルコット。俺に何か用なのか？」

「まぁ！なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度と言うものがあるんではないかしら？」

「（…めんどくさい奴に当たったな）」

この手の相手は正直言って苦手だと一馬は思う

因みにＩＳは女しか使えず、そのため世界は［女＝偉い］といった構造となっているために女性はその利点につけ込んで、男を奴隷のごとく利用している

男は刃向かえば最悪濡れ衣着せられ、確証が無いまま豚小屋行きな不条理な扱い

男の誰しもがこの世界は歪んでいると思っているはずだと

話は戻すが一馬はこの場をさっさとやり過ごしたかったため

「だが、もう少しで授業だ。早めに終わらせた方が良いんじゃないかと思うんだが？」

「確かに一理ありますわね」

セシリアが咳払いを一度した後しゃべった

「この私みずからって聞いてますの！？」

「ん？あぁ、すまない。そう言えば次の授業の準備をしてなかったなと思いだして、準備していたのだが…それで、何を言おうとしたんだ？」

一馬の質問にセシリアは俯き、体を震わせている。怒っているようだ
そしてセシリアが何かを言おうとした時チャイムが鳴る
「ふんっ！」
セシリアは一馬に何も言わず。自分の席へと戻っていくのを確認すると安堵の溜め息を吐き、次の授業にのぞんだ
「―であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ―」
真耶が教科書を読み進めていき、生徒達はノートを取っている。一馬もそのうちの１人である
ただ、１人だけ違う奴がいた。一夏だ。一夏から全く分からないというオーラが出ているのを一馬は感じ取っていた
気持ちが分からない訳ではない。女子生徒はＩＳに関する授業があるから大抵は分かる。しかし、男子は全く教えられない為に１から勉強しなきゃならない
だが、入学前に渡された参考書を使って勉強すればいけるはずなのだが

「織斑君。今の場所で分からない場所がありましたか？」

「はい」

「どこですか？なんでも訊いてくださいね。何せ私は先生ですから」

真耶は教科書を読み進めていくのを止め、一夏に大丈夫かと聞いてくる。

良い先生だなと一馬は感じたと同時に動きがかわいいなと感じていた

そして一夏は少し迷っていて、何かを決意しハッキリと言った

「ほとんど全部分かりません」

その一言は周りの空気と真耶の表現を変えるほどの威力である。一馬も若干驚いている

「ぜ、全部ですか…えっと、織斑君以外で今の段階で分からないという人はどれくらいいます？」

真耶の質問に誰も手を挙げない所か微動だにすらない

「お、沖野君は大丈夫ですか？ついてこれてます？」

同じ男だがこいつは大丈夫であろうと思われてるのだなと一馬はそう思っている。周りの視線もそんな感じだ

まだ、一馬は真耶の質問に答えてないので大丈夫ですの表情で答えた

「俺は今のところ大丈夫ですので気にしないで下さい」

言ったら真耶は安堵、一夏は驚愕の表情を浮かべていた

「…ちなみに織斑。入学前に渡されたＩＳの参考書は読んだか？」

千冬の質問に一夏は迷わずこう答えた

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「（捨てたぁ！？いやいや、訳が分からない。どうやったら電話帳と間違えんの！？表紙で分かるだろ）」

一馬の内心でのツッコミをしているとき千冬が一夏に出席簿アタックを決めた

「痛ぁっ！？」

「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者。織斑、再発行してやるから一週間で覚えろ」

一夏は無理だと言っていたが、千冬が凄みを見せたので了承し授業は再開された

「さてと」

授業が終わり今は休み時間。一馬は一夏にファーストコンタクトを取ろうと思い、行動した

「大丈夫か織斑？」

「大丈夫じゃない」

一夏は机に突っ伏していた。先程の授業がきているのだろう

一夏は起き上がり、一馬の方を見て何か言いたそうなので推理してみた

「名字は分かるが名前は分からない…とか？」

「そうそう。そうなんだよ。えーと」

「一馬。沖野　一馬だ。織斑」

漸く分かり一夏はホッとしていた

「そうか一馬か。なぁ、一馬ってよんで良いか？俺のこと一夏ってよんで良いから」

一馬は迷ったが、此処は了承した。折角の行為を無駄にしたくはない

「とりあえず同じ男のＩＳ乗りとして宜しく頼む一夏」

「あぁ、此方こそ宜しく」

自己紹介も済ますとあの女子生徒が現れた

「ちょっと、宜しく？」

「…お前か。セシリア・ウォルコット」

「オ・ル・コ・ッ・トですわ！」

現れたのはセシリアでなんだか変なコント？をやっている

「一馬、知ってんのか？」

「さっきの休み時間に話しかけられた」

「途中で話しをはぐらかされましたですけどね」

セシリアが一馬と一夏の会話に割ってはいる

「んで、俺達に何か用か？イギリス代表候補生さんよ？」

「…なぁ、一馬。聞きたいことがある」

「なんだ？」

一夏の質問に一馬は聞くことにした

「代表候補生って何？」

一夏の質問は2人の時間を一瞬停めるほどの威力はあった

「そう言えばお前、捨てたんだな参考書。代表候補生っていうのは」

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。…あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「…そういわれればそうだ」

一馬は一夏が外人に母国語の日本語についてツッコまれるのはどうかと思っていて口には出さなかった。それが一夏の名誉の為である

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。その現実を、もう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「なるほど。それはすごいな」

「…貴方がた、私をバカにしていますの？」

一馬はしてるが、一夏は知らない

「いや。全然」

「幸運だっていったの、そっちじゃないか」

とりあえず一馬はごまかしたもののの

「まぁ、いいですけれど。大体織斑さん、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを操縦出来ると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何か期待されても困るんだけど」

「ふん。まぁでも、私は優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

「（相変わらず聞いてりゃ、癪に障る言い方だなおい）」

一馬はこの場をやり過ごすために黙って聞き続けた

「ＩＳのことで分からないことがあれば、まぁ……泣いて頼まれたら教えて差し上げても良くってよ。何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を強調するセシリアだが、此処で残念なお知らせがやって来る

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「…俺も」

一夏は分からないが一馬は負けそうだったが何とか勝ちを拾った。記憶を思い出す。一か八かの賭けで当たり、そこから攻めた結果勝ったのだ

「じゃ、じゃぁ私だけたおしたっていうのは…」

「〔女子限定〕ってオチだろ。…一夏、悪いがチャイム鳴りそうだから先に席に戻る。あの出席簿アタックは食らいたくないしな」

「お、おう」

「ちょっと！そういって逃げ…」

セシリアが言い切る前にチャイムが鳴った

「くっ…いいですか！またあとで来ますから、逃げないでください！」

一馬は断ると言いたかったが、セシリアはスタスタと席についたため言えなかったのであった

## 第2話　代表候補生（後書き）

如何だったでしょうか第2話

実はこれ3回目の投降なんですよね

1回目は実験

2回目は手違いで消去

3回目はバックアップなしの記憶を頼りに制作し漸く完成しました

大変だったなというより自分のミスなんですよね（汗）

次回話はセシリアに決闘を申し込まれる話です

因みに一馬がＩＳを動かした理由はまだ先になりますのでご了承下さい

以上リオでした

## 第3話　決闘予告（前書き）

今回の話のラストに原作ではまだ早いあの方が登場です

# 第3話　決闘予告

【教室内】

「それではこの時間は、戦闘における各種装備の特性について説明する」

今まで教壇には真耶ではなく千冬が立っていた。大事なことなのか、真耶までノートを手に持っていた

「あぁ。その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表を決めないとな」

ふと、千冬は思い出したかの様に言う。忘れていたんだろうが、言うには重要な話なのだろう

「クラス代表はそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く会議への出席…クラス長だな。一度決めたら一年間変更はないからそのつもりで」

「（興味ないな。俺はパス）」

と一馬が思っているなか

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私も！」

と一夏が候補に挙げられる

「では候補は織斑一夏。他にはないか？自薦他薦は問わないぞ」

「って、俺ぇ！？」

「織斑、席につけ。邪魔だ。さて、他に居ないのか？いなければ無投票当選だぞ」

「いや、俺やらな…」

一夏は拒否するが、千冬は一夏をひと睨みし

「自薦他薦は問わないと言ったはずだ。選ばれた以上、覚悟を決めろ」

「うっ……」

「（ドンマイだな一夏）」

一夏が選ばれそうになっていることを一馬が他人ごとに思っていたとき

「でも、沖野君もいいかも」

「あっ、私も沖野君に推薦します」

「（なっ！？）」

一馬は驚いた表情しながら推薦した女子生徒を見る

「ふむ。ではもう候補二人目は沖野一馬。他に居ないのであれば、この二人への投票になるぞ」

一馬は辞退したかったが、一夏の様になると思い腹を括ったが

「待ってください！納得がいきませんわ！」

セシリアが机を叩きながら立ち上がり納得しないのか抗議する

「そのような選出は認められません！だいたい、男がクラス代表な

んていい恥さらしです！そのような屈辱を、一年間通して味わえとおっしゃるのですか？」

「（そんなこと言うなら、やりたいって言えば良いのにな）」

一馬はため息吐きながらそんなことを思っていた

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由だけで極東の猿になるのは困ります！私は、このような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！だいたい、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、私にとっては耐えがたい苦痛で」

言い放題だなと一馬は思っていた時

「イギリスだってたいしてお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ！？」

「（やっちまった）」

一夏がセシリアの祖国を侮辱したのか、セシリアの表情がワナワナとしている

「あっ、あっ、あなたねえ！私の祖国を侮辱しますの！？」

「（…マズいな）」

一馬は2人を停めようと立ち上がる

「2人とも落ち着け」

「止めるなよ一馬。今、俺は凄くムカついてる」

「えぇ。私もですわ！こんな猿に祖国を侮辱されるなんて許し難いのに」

「…一言言っておく。原因作ったのはオルコットだぞ」

一馬が言った時、セシリアは一馬をがん見する

「私が悪い！？私は悪くはないですわ！！」

一馬は悪びれもないセシリアに今まで我慢していたものが流出する

「…なら問わせて貰う。イギリス人は傲慢ちきで他人を侮辱するし

か能がない人種なのか？」

「なっ、なっ！？」

セシリアは驚いていたが一馬は気にもせず暴言を吐く

「今まで黙ってりゃいい気になって。私は悪くない？お前が最初に問題を起こしたんだろうが！なのに悪びれもせずに次から次へと高圧的なこと言いやがって、代表候補生だからといって言い過ぎなんだよ！！」

一馬は我慢できなかった。この女は女＋候補生という歪んでいる権利で偉ぶっている女に過ぎないと

「あ、あなた私を侮辱してますの！！？」

「現にしてる。気づけよ」

セシリアはワナワナと震え、次に取った行動は

「決闘ですわ！」

なんでそうなるか分からないが、一馬も一夏も同じことを考えてた

「俺は構わない」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第3アリーナにて行う。オルコット、沖野、織斑の3名はそれぞれ準備をしておくように。では授業を始める」

千冬は締めくくって授業が始まった

「あ〜。なんで、あんなこと言っちまったんだろう」

日はあっと言う間に過ぎて放課後、一夏は顔を机に突っ伏し落ち込んでた

「腹括れ一夏。決まってしまったのは変えられない」

しかし、セシリアは代表候補生。エリートなのである。対して一馬は今の実力で勝てるか多少の不安は抱えていた

「一馬は大丈夫なのか？」

「正直言えば不安だな」

「お前もか」

一夏はほっとしていたが現実みろよと言いたくなったのは置いとき

「ああ、織斑君、柳瀬君。まだ教室に居たんですね。よかったです」

と入ってきて俺らに言ってきたのは真耶であった

「あ、山田先生。どうしました？」

「えっとですね…寮の部屋が決まりました」

真耶は2人に寮の鍵を渡す。よく見ると、部屋の番号が違う

その後、真耶は2人に寮内の説明を受け終わり早速寮内に行ってみることにした

【寮内・一馬の部屋】

「個室でも結構広いな」

一馬は渡された鍵で部屋のドアを開け、部屋を見た第一声があれである

部屋には大きめなベッド。机、シャワールームやトイレ、更にコンロもあり、そこいらのビジネスホテルでも豪華なきがする

「さてと」

一馬は机に付いている椅子に座って、鞄から1冊の小さなノートを取り出す。そこには〔ＩＳ関連ノート〕と書かれていた

一馬はノートに何かしらをシャーペンで書き始めてから数分後、誰かがノックする

「どなたですか」

と一馬はドアを開け相手を見ると水色の髪をし、赤い瞳をした女子生徒である。よく見ると、リボンの色で2年生だと分かった

「君が沖野君だよね？」

「そうですが、どちら様でしょうか？」

いきなり名前は失礼かと一馬は思っていたが、その女子生徒は問題がなさそうでこう言った

「私は更識　楯無。清音さんに宜しくって言われて様子見に来ましたぁ」

一馬は渡されたメモに更識　楯無の名前が書いてあったのを思い出したのであった

## 第3話　決闘予告（後書き）

如何だったでしょうか第3話

えっ？楯無の出番が早いだって？

良いじゃない出したかったもの。ネタバレだけど妹さんも出すの早いよ

さて、次回話はオリジナル話になる予定です

それとおこがましいですが、此方への感想宜しくお願いします

## 第４話　部屋内にて（前書き）

今回の話はオリジナル話です

では、どうぞ

## 第４話　部屋内にて

【寮内・一馬の部屋】

「粗茶ですが、どうぞ」

「おっ、ありがとね」

一馬は楯無を部屋に入れて茶を出し、気になることを質問する

「いきなりなんですが、更識先輩とチーフってどんな関係なんですか？」

「清音さんと私の関係？そうだね……親戚みたいなものと、私のＩＳの製作場を提供してくれた間柄とでも言っておこうかな」

「私のＩＳって、もしかして代表候補生なんですか？」

一馬は更に質問するが

「な・い・しょ」

と言って楯無はウィンクをとる

一馬も、食いつかず引き下がる。チーフ（清音）もやり方は違うが似たようなことをしていたので、これ以上聞いても無駄だと悟ったのだ

「逆にこっちが質問するけど、沖野くんはどうやってＩＳを動かしたのかな？」

更識は一馬に近づき、顔と顔との距離は近く一馬はかなり緊張している

「ち、チーフに聞いてくれませんかね？お、俺、の口からじゃい、言いたくないんで」

「…うん。分かった」

楯無は一馬から離れ一馬がホッとしたのはつかの間、楯無が沖野君と呼び

「私が近づいたとき、ドキドキしたでしょ」

としたり顔で言われ、一馬の顔が一気に赤くなる

「アハハハハ！図星なんだ。素直で可愛いね沖野君は」

「っ！？」

一馬は穴があったら入りたい気持ちで一杯になる。そして、この人には勝てないなとまた悟ってしまった

「さて、話は変わって風の噂なんだけど沖野君と織斑　一夏君が君のクラスにいるイギリス代表候補生と決闘するって聞いたんだけど、本当かな？」

「本当ですよ。一週間後に決闘をやることに決まりました」

一馬は落ち着かせながら茶を飲む

「へぇ、噂は本当だったんだ。それで勝つ見込みは？」

相手は代表候補生。エリートなのである

一馬＆一夏とセシリアでは差が大きすぎる筈

だが、一馬は

「勝ちます。勝つ見込みはムズいですが勝ちます。俺と［打鉄一零

式」は」

一馬の宣言と同時に首に巻かれているチョーカーの宝石の部分が一瞬光ったかのように見えた

【寮内・セシリアの部屋】

「全く、最悪ですわ」

セシリアが1人シャワールームで、シャワーを浴びながら悪態を付いていた

原因は2つ。1つは織斑　一夏、もう1つは沖野　一馬。特にセシリアが腹を立てていたのは一馬の方である

「人の名前を間違えるわ、祖国と私を侮辱するわ、本当に最低ですわね」

セシリアは一馬に言われたことを思い出す度にイライラは募っていく

しかし

「（ですが、今までの男達とは違いましたわね）」

セシリアが会ってきた男達はオルコット家の莫大な財産目当てだったり、媚びを売っている者だったりと顔色ばかりうかがう者であっただが、一馬と一夏は侮辱はしたが顔色を窺ったりはせずに自分に言いたいことを言っていた

「（ですが、そんなことはどうでも良いですわ。今度の決闘で勝つのは私、セシリア・オルコット。この私が勝てば、きっと他の男達と同じようになるんでしょうから）」

セシリアは先程思考をシャワーで浴び流すように浴びていた

【寮内・一馬の部屋】

『まさか、イギリス代表候補生と決闘を申し込まれるとはね』

部屋は再び一馬の部屋に戻って、楯無がいなくなってから数時間後に一馬は携帯電話で会話をしていた

受話器越しからには女性の声が聞こえる

「そうか？あんたにとっちゃ、どっかの代表候補生と闘うことにな

ることは予想済みだったと思うが？」

『違いない。昔、私の知り合いがあんたと似たことやっていたしね』

電話の女性はケラケラと笑っていた

『そう言えば、メインのあれの最終調整が済みそうでね、決闘までには間に合いそうだよ』

「そうか。あれが終わるのか。漸くか」

一馬の表情は安堵していた

『あぁ、漸くだ。漸く［零式］のデビューがやってくる。そしてあんたのＩＳ操縦者としてのデビューだ。…勝てるかい？」

「勝つ。俺の目的、あんたの目的の為にも負ける訳にはいかないからな」

「そうかい。それじゃあ、決闘頑張れよ」

一馬はあぁと言って電話を切る

「そうだ…俺は負けるわけにはいかない。俺の目的の為に」

一馬は携帯を強く握りしめ、此処には居ない誰かを憎んでいるような表情をしていた

## 第４話　部屋内にて（後書き）

如何だったでしょうか第４話

今回は一夏が箒とのゴタゴタの最中に一馬やセシリア側の内容を出してみました

次回は原作沿いの話になります

これからも頑張って行きますので応援宜しくお願いします

## 第４話　決闘開始？（前書き）

今年は今回の話で終了です

## 第４話　決闘開始？

【寮内・一年生寮の食堂】

「美味いなこの味噌汁。ダシが効いてて」

一馬は１人食堂で朝食をとっていた。一馬の朝食はおにぎり１つ、みそ汁に漬け物とお茶だけの質素なもの

本人は余り食べないので、これ位で充分なのである

「ねぇ、彼が２番目にＩＳを動かした子でしょ」

「なんでも動かしたその日からどっかの研究所と契約してるって噂だよ」

「えぇっ！？じゃあ、彼も専用機持ちなの？良いなぁ」

周りで一馬に関する話が聞こえる。大体は当たっている

一馬は大企業グループ、藤野グループの社長令嬢の藤野　清音率いるＩＳ研究所と契約し専用機を持っている

ただ、此処にいる全員は知らないことがある。それは契約内容。こ

れは機密事項な為、一馬と清音しか知らない内容
もし、それが知られたら一馬は全世界を敵に回すかもしれない

「なぁ、悪かったって」

近くで声が聞こえる。一馬は声の方向を料理を持った一夏とポニーテールの女子生徒の姿だった

一馬はとりあえず一夏に声を掛けた

「よぉ、一夏」

「ん？おぉ、一馬。おはよう」

一馬と軽い挨拶をした一夏はポニーテールの女子生徒と一緒に一馬の近くの席に座る

「一夏、昨夜何かあったのか？」

「そうなんだよ昨日、ほうーイタッ！？」

一夏が説明しようとしたとき、ポニーテールの女子生徒が一夏の足

を踏んでいた

「なにすんだよ箒！？」

「余計な口出しはするな」

とポニーテールの女子生徒の声音から若干脅迫のように聞こえたのは気のせいだろう

「…箒？」

「あれ？覚えてないのか？ほら、同じクラスの篠ノ之　箒だよ」

箒は軽く一馬に会釈していたが、一馬は見ていなかった

「（篠ノ之…しの、の、の？シノノノ？マサカ、アノオンナトオナジミョウジ？）」

一馬は若干混乱している。まさか、彼女の姉妹らしき人物が目の前にいたのだから

「…一馬？おーい、一馬？」

「はっ！？…なんだ？一夏？」

「大丈夫か？今、ボーっとしてたみたいだけど」

一馬は顔を振り、気持ちを整え

「大丈夫だ。問題ない。悪いが先に行くわ」

一馬は一気に朝飯を食し、食堂から去った

箒ｓｉｄｅ

「（一馬という男、今私の名字を聞いた時、目が揺らいでいた）」

箒は一馬のことを思い出していた。一夏は見てなかったが、一馬の瞳がぶれていたのを箒は見逃さなかった

「（私の名前では反応はなかったことから、もしかして姉さんに関係があるのか？）」

一馬の様子を箒は推察していると

「なあって、何時まで怒ってるんだよ」

一夏が声を掛けてきたので、箒は推察を辞め、一夏の話に集中することにした

箒ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして、時間は過ぎて放課後

「ここ…みたいだな」

一馬は剣道場の前に居た。一夏が箒に引きずられて此処に居ることをクラスメートから聞いてここにいる

そして、剣道場に入り道場につくと床に座り込んでいる一夏と激怒している箒の姿がいた

「よぉ、お疲れさん」

「一馬。どうしたんだ？」

「なに、セシリア・オルコットに関する情報提供だが…聞きたいか

？」

一馬は鞄から一冊のノートを取り出し一夏に見せるとみたいと言わんばかりの視線を送る

「見たいようだな。少し待て……セシリアのＩＳはブルー・ティアーズ、第三世代型で中距離射撃型、武装はレーザーライフルに自立機動兵器、接近武器はあるが、殆ど言った２つの兵器で叩くそうだ」

「つまり、一夏が勝つには上手く懐に飛び込んで接近戦勝負ってところか」

「そういうことだ。篠ノ之　箒」

一夏の勝つ方法を箒は言って一馬は肯定した

「沖野、私はフルネームで呼ばれるのは好きじゃない」

「…じゃあ、篠ノ之で」

一馬が箒を苗字で言うと、頷いたところで一馬はんじゃと軽くあいさつして、剣道場から去ろうとしていた

「あれ？一馬は訓練しないのか？」

「俺は射撃よりだからな。こっちはこっちでやってる。んじゃあな」

一馬はそう言って剣道場を後にする

そして一週間が経ち、遂に決闘の日がやって来る

【第３アリーナ・Ａピット内】

「……」

一夏が専用機［白式］でセシリアと戦っている一馬はＩＳスーツを着ており、ピット内で待っていた

一馬の黒いＩＳスーツは既存のスーツより少し違い、首より下は全てＩＳスーツで露出がない。よく、某ロボットアニメのパイロットスーツみたいだと言われる

「よっ。待ったかい？」

一馬の後ろに黒いおかっぱに青い着物を着た女性が現れた

「…いや、待ってない。余裕だチーフ」

「そうかい。そりゃ安心したよ」

一馬に会いに来た女性、彼女が藤野グループの社長令嬢である藤野清音である

「約束通り、あれの最終調整が終わったんでな。持ってきた」

と清音が言うと鈍い音をたてて、ピット搬入口が開く

そして、搬入口から姿を見せたのは一丁の銃。形状は火縄銃らしきもので長さは約１．５ｍで口径は約１０ｍｍ

「やっと来たな……［種子島］」

「あぁ、火縄銃の阿波筒を元にした狙撃銃で威力、射程距離、射撃速度は中々のもので第３世代と引けをとらない武器だ。ただ、装鎮数が少なくてな、リロード用に予備の弾丸も用意したが…大丈夫かい？」

「問題ない。さて、インストールを済ませたほうが良いな。一夏が終わるまでにな…行くぞ、［零式］」

一馬の言葉に応えるように、首のチョーカーが反応し形状が変わり、一つの鎧らしき姿へと化し一馬は鎧を装着していた

鎧の名は［打鉄ー零式］。色は深緑で背中にスラスターがついて肩には大きな盾らしきモノがある

（零式起動。各部チェック…問題なし、ハイパーセンサー…異常なし、各兵装問題なし）

起動したとき、モニターが次々と展開されチェックが済むと一馬はモニターを操作する

「［種子島］の量子変換（インストール）を開始」

モニターからは了解と現れ、量子変換完了を表すパーセンテージが動き出してから数分後

（試合終了。勝者、セシリア・オルコット）

ピット内にもブザーとアナウンスが聞こえる

「一夏が負けたか…そうなると俺はセシリアが相手か」

ルール上、勝った方が残った方と戦うことになっている

つまり一夏に勝ったセシリアと一馬は戦う

「相手は代表候補生か…まっ、頑張りなさんな」

「あぁ。…チーフ」

「なんだい？」

量子変換が終わり、一馬は清音に質問をする

「大事なもん奪われた奴はどうすれば良い？」

「知らんよ。私に聞くな。それよりもあんたと［零式］の初陣だ…しっかりやって来な！」

「そうさせて貰う」

一馬と清音の会話が終了し、通信が入る。相手は真耶だ

「沖野君。出番ですので、出撃して下さい」

「分かりました」

一馬は出撃し、ピットから外へ出る

【第３アリーナ】

「あら、あなたも逃げずに来ましたのね」

一馬はセシリアと向き合い、セシリアが挑発してきた

「生憎、此方は逃げる気なんてさらさらないんでな。セシリア・ウォルコット」

「オルコットと何回言えば分かりますの！？」

「いやいや、ワザと言ってるに決まってるだろ」

しかし、逆に挑発し見事にキレた

「あぁもう！あなたはぎったぎたに差し上げますわ！！泣いても謝っても許しませんわよ！」

「上等。こっちがギタギタにしても文句言うなよ」

カウントダウンがされ青になったと同時に一馬は［種子島］を、セシリアは全長２ｍ以上のレーザーライフル［スターライトｍｋ？］

を構え、引き金を引いた

## 第４話　決闘開始？（後書き）

如何だったでしょうか第４話

ここでとりあえず言っておきます。主人公機は某ガンダムをモチーフとしています

ネライウツゼ！

今ので分かった人も多いと思われますが機体名は言いません（笑）

次回は一馬とセシリアの勝負となります

果たして勝つのはどっち！？

これからも頑張って行きますので応援宜しくお願いします

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3679z/

IS インフィニット・ストラトス ～大切なものを奪われた少年～

2011年12月31日16時46分発行